

牧師室から (2022.4.17)

愛犬アイネが死んで明日(4月15日)で1年になる。あちこちの庭先でモッコウバラがきれいに咲いていた。その時は、生きていてこんなに悲しいことがあるのかと思ったが(自身、人生であまり悲しい経験をしていないのか、鈍感だったのか分からない)、今では、確かに悲しみは残っているが、当時ほど辛いということはない。何だかもうずっと昔のようなことで、懐かしくさえある。悲しみや苦しみを癒してくれる最良の薬は「時間」であろう。ところがすべての悲しみや苦しみが、時とともに癒されていくかということ、そうとは限らない。いくら時間が過ぎても癒されないシコリというか棘みたいなもの、すなわちトラウマがそれぞれ人にはあるのではないか。その痛みを共に負ってくださるのは、もちろん親身になってくれる人やカウンセラーはいるかもしれないが、究極的にはイエス様である。

今度の主日はイースターである。人も動物も万物が新たにされて、主の下で相見える希望がある。

「やすかれ、わがころよ・・・主イエスのともにませば
耐ええぬ悩みはなし。(1節)

やすかれ、わがころよ・・・月日の移ろいなき
み国はやがて来たらん、
うれいは永久に消えて、かがやくみ顔あおぐ
いのちのさちをぞ受けん。(3節)」 (讚美歌21—532番)

(鈴木淳一牧師)